

令和3年10月の解説（週間天気予報）

【10月の天候状況】

上旬は、本州付近を繰り返し高気圧が通過する一方、日本の北を低気圧が通過したため、北日本では天気は数日の周期で変化したものの、南から暖かい空気が流れ込みやすく、平均気温はかなり高くなりました。一方、降水量は平年並でした。日照時間は北日本日本海側で多く、太平洋側では平年並となりました。東日本、西日本及び沖縄・奄美では暖かい空気の流れ込みに加え、高気圧に覆われて晴れた日が多かったため、3日は大分県の日田で最高気温 35.7℃の猛暑日を観測するなど気温はかなり高く、日照時間はかなり多くなりました。特に西日本では平均気温は平年差+3.0℃で、10月上旬として1946年の統計開始以来1位の高温、日照時間は平年比176%で、1961年の統計開始以来1位の多照となりました。降水量は、東日本日本海側と西日本でかなり少なく、特に西日本日本海側では平年比2%で、10月上旬として1946年の統計開始以来1位の少雨となりました。東日本太平洋側では1日に台風第16号が接近してまとまった雨となったため、また沖縄・奄美では高気圧の南側となり東からの湿った気流の影響で雨が降った日があり、いずれも降水量としては平年並となりました。

中旬は、15日頃までは、日本付近を高気圧が通過する一方、日本の北を低気圧が通過したため、寒気の影響を受けにくく全国的に気温が高くなりました。17日からは、この時期としては強い寒気が流れ込み、全国的に低温となりました。北日本では低気圧や前線の影響を受けやすく、日照時間は北日本太平洋側でかなり少なく、北日本日本海側で少なくなりました。降水量は北日本日本海側でかなり多く、北日本太平洋側で多くなりました。東日本日本海側と西日本日本海側では、低気圧や前線の影響を受けたことに加え、17日以降は寒気が流れ込みやすく曇りや雨の日が多かったため、日照時間は少なくなりました。降水量は東日本日本海側で多く、西日本日本海側では平年並となりました。東日本太平洋側と西日本太平洋側では、高気圧に覆われて晴れた日もありましたが、本州沿岸から南海上を通過する低気圧や前線の影響で曇りや雨の日もあり、日照時間、降水量はいずれも平年並となりました。沖縄・奄美では、13日頃までは台風第18号に伴う湿った気流の影響で曇りや雨の日が多く、17日からは寒気の影響で曇りの日が多かったため、日照時間は少なく、降水量は多くなりました。

下旬は、北日本では、23日頃までは大陸から張り出す高気圧から流れ込む寒気や低気圧の影響で気温が低く曇りや雨となり、まとまった降水量となったところもありました。その後は高気圧と低気圧が交互に通過して、天気は数日の周期で変化しましたが、高気圧に覆われる日が多くなりました。平均気温は低く、日照時間は多くなりました。東日本と西日本では、高気圧と低気圧が交互に通過して、天気は数日の周期で変化しましたが、高気圧に覆われる日が多くありました。本州の南岸を低気圧が通過して太平洋側に湿った空気が流れ込む日がありましたが、日本海側はその影響を受けにくく、東日本日本海側では降水量がかなり少なくなりました。東日本太平洋側と西日本日本海側では降水量が少なくなりました。日照時間は、東日本日本海側と西日本日本海側で多くなりました。小笠原諸島には台風第20号が接近し、28日から29日にかけて記録的な大雨となりました。平均気温は、中旬に引き続いて23日頃まで寒気が流れ込みやすい状態となったため、かなり低くなりました。沖縄・奄美では、大陸から寒気が流れ込んで平均気温は低く、曇りや雨の日があったものの南からの湿った空気の影響を受けにくかったため、降水量は少なくなりました。

【10月の検証結果】

「降水の有無」の全国平均の適中率(3～7日目平均)は、例年値^(注)よりも4ポイント高い77%でした。地方別の適中率では、九州南部を除いた各地方で例年値を上回りました。

最高気温の予報誤差(2～7日目平均)は、全国平均で例年値よりも0.2℃小さい1.9℃で、北海道、関東甲信、東海、北陸、近畿、四国、九州北部、沖縄の各地方で例年値よりも小さくなりました。また、最低気温の予報誤差(2～7日目平均)は、全国平均で例年値よりも0.2℃小さい1.8℃で、北海道、東北、関東

甲信、東海、北陸、近畿、中国、四国、九州北部の各地方で例年値よりも小さくなりました。

(注) 例年値は気象庁HP(予報精度検証)内「月毎の精度の例年値」を参照してください。

【12月の週間天気予報の利用にあたって】

12月は、本格的な雪の季節の始まりとなります。北日本では雨よりも雪となる日が次第に多くなり、天気予報では降水が雪となるか雨となるかが重要なポイントとなります。天気予報では、「雪」や「雨」という予報だけではなく、雪になる地域や時間帯の割合が大きいときは「雪か雨」、また、雨になる割合が大きいときは「雨か雪」と発表しています。これにより雪の可能性がわかりますので、雪への早期の備えに週間天気予報をご活用ください。